私の聞きたい諸点

喜多野　清一

村研の発足以来度々問題にされてきた「村落共同体」を共同課題にしての泊り込みの大会だから、村研自体の発展充実のため大きい意義を持つだろうことはもちろん、私も私なりに色々な期待や楽しみを抱いてゐる。課題そのものについて色々啓発を受けるだろうことはまづ第一であるが、そのほかにも、村落を研究する上の様々な問題や方法について教示を受けることだろう。今度は時間の余裕があるから、ゆっくり話も聞けるし、自然解らないことは説明を求めることも出来るだろう。それに研究上の体験を膝を交へて語り合へるのは少なからぬ楽しみだらうと、今から想像してゐる。それはともかく、本年大会の看板である共同課題については、やはり私は社会学の考へ方に立って聞きもし解釈もしてゆきたいと考へてゐる。それは別段それにこだわるとか、それを固執するといふ意味ではない。しかし社会学的立場――もちろん私のばあいそれも甚だ怪しいものだが――に一応立って村落社会の勉強をやってきたのだから、共同体論についても、この立場がどこまで理論構成的な意味で役に立つかを、自分の問題として考えてみたい、といふのが私なりの期待なのである。たゞ今度の報告には、「村落共同体」概念の理論的検討を直接取扱ったものはなく、対象村落についての調査に基づいた具体的な村落生活研究の報告が主であるやうに

聞いてゐる。しかし共同課題を踏まへての報告であるから、そこには共同体理論が内包されてゐると思ふし、むしろそれを前提とした具体的な村落生活の分析が示されるだらうから、それぞれの立場からの共同体理論が、むしろ却って豊富な生活内容を通して実際的に現知されることと思ふのである。さうなると参加者の各自の立場からの解釈と対比させる具体的な場面となるだらうし、私などもそこから色々な益を享けることにもなるだらうと思ふのである。さういふ理論的立場の違ひがあってよいのだし、むしろそれがもっと整理された形ではっきり提示されることが望ましいと思ふ。だから逆説的な言ひ方かも知れないが、私などはもっと私なりの立場を一層理論的に明確にするために今年の大会報告を拝聴したいと思ってゐる。それは自分なりの理論的立場が可能であるかどうかを確かめたいので、繰り返して言ふが、それに拘泥するつもりはない。

そこで私はやゐぶん慾の深い注文を持ってゐる。私は出来るだけ対象村落の生活構造の全体が理解されるやうに話して頂くことを論者にお願ひするのである。論題によってはさうすることの難しいばあいもあるだらうが、しかしその問題が全体構造とどういふ連関において論ぜられてゐるのかを示して下さることは出来ようと思ふ。論者は村落社会生活のどういふ構造を共同体と考へてゐられるのか、それを教示して下さることが一層ありがたいのである。社会学ではどう解釈するかなんと大言出来る私ではないが、やはり共同体を一個の社会集団として、どういふ構造的性格を持つものであるかといふ観点から考へてゆきたいので、とんな注文を掲くのでゐる。だから村落生活の全体構造を理解したいのである。たとへば経済生活はもちろんその重要な基礎部分をなしてゐるが、それを部分として生活の全体がどのやうに構成されてゐるのを共同体といふのだらうか。解りきったことのやうで、おそらく色々な意見が出たり、あるひはさう明確化されないまゝにこの概念を使ってゐたりするのではあるまいか。また共同体は社会集団としてはそれ自体の生活構造の自主性を持ってゐると考へるのだが、その自主性を論かむるために機能集積のあり方が探求された。その機能集積がさらに統合性を持ってゐれば、一層共同体としての自主性があるものと理論的には考へてよいが、現実にはこの機能集積・統合は漸々に様相を呈してゐる——あるひは呈するものとして報告されてゐる。そこでこの場合にも色々と問題がある。それをこゝでは簡単にさへ触れる余裕はないが、状況自体が複雑である上に、問題理解について研究者側にも問題があると思ふ。その辺の整理がまづやはり重要な仕事だと思ふのである。それは方法論的な整理である。この点では外国の共同体研究から学ぶ余地はまだあるやうに思ふ。ところが共同体についてはさらに規範的統合の問題が重要である。これは人々を共同体の意識において拘束する。この規範的統合の内容は村落の共同体としての性格を規定する。それは村の支配構造の問題でもある。支配は村落において慣習にも重なってゐるだらう。その相互連関の中で村落がどういふ支配構造を持つ共同体をなしてゐるかといふことは、重要な意義を持つ研究問題で共同体が規範的統合を失ってゐないか、それは如何なる内容を持ってゐるかなどの諸点が強く関連してゐると考へるのである。かうした問題にふれて啓蒙を受けることを私は強く希望してゐる。たいへんお古い話であるかも知れない。だから人に説かうといふのでない。さういふ立場で諸説を聞かうと思ふのである。中野君から寄稿を求められた際も、私の聞きたい点を書くことで諒解して貰ったわけである。甚しい走り書で、誤解を生む惧れもあるが、もともと右のやうな性質の文章として、切に御寛恕を乞ひたい。そしてもし出来れば、かうした諸点についてはもちろん、その他色々お話を伺ひたい。

（九月十三日）

＊

＊

＊